



きたまえぶね

## 北前船が紡ぐ、食の文化 (2)

さて小学校3年生の社会科では、旧学習指導要領「古くから残る暮らしにかかわる道具」から、新学習指導要領「市の様子の移り変わり」として、主な道路やその経路など、交通の広がりへ着目し、「人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え」ることが示されています。地域が限定されますが、海に面する市町村では、交通による生活の変化を切り口として、可能性を広げられないか期待しています。

### 不自然?な、昆布

小学校家庭科の新指導要領解説では、グローバル化に対応し、日本の伝統的な生活について扱うとしています。また【和食】という単語にも触れ、「だし」を基本とし、その材料としては「煮干しや昆布、かつお節など様々な材料」が挙げられています。

さてここで、なぜ昆布を代表事例として

女子栄養大学短期大学部非常勤講師  
資源と環境の教育を考える会『エコが見える学校』  
関東学院大学非常勤講師  
三信化工株式会社

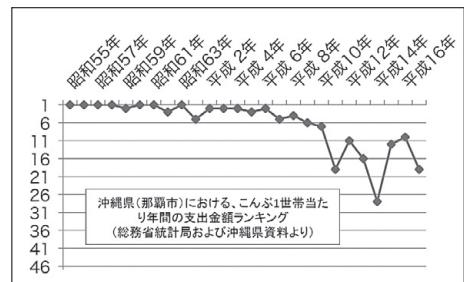
### 海老原誠治

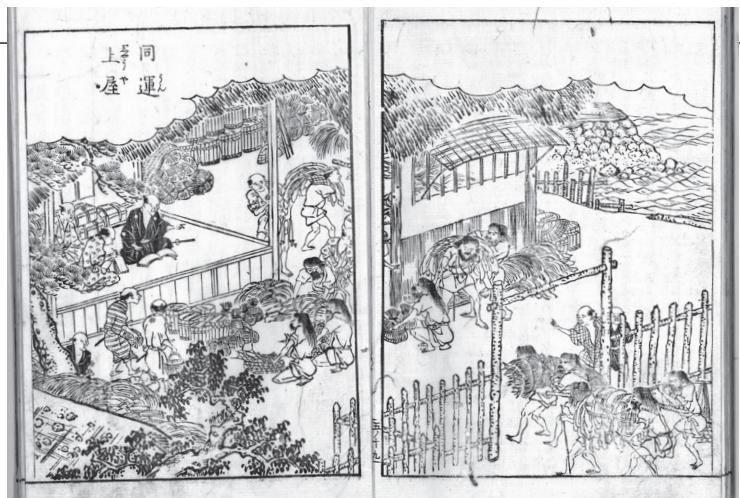
えびはら せいじ

佐賀大学物理学科卒業、佐賀県立有田窯業大学校・常勤講師を経る。

◎政府インターネットテレビ『徳光・木佐の知りたいニッポン～守りつなぎ広める日本の心 和食』で和食器の給食、出前授業の様子が放送されています。

図 沖縄県の昆布の支出額順位





▲山海名産図絵、寛政11(1799)年、当時の物流の窓口である「運上屋」の図。説明には「蝦夷の産は・鹿の皮 鮋 鮭 鯿 鮑 鮒 ニシン 数の子 等なり」とある。

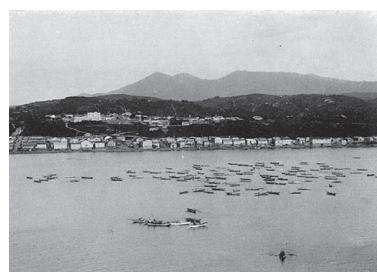
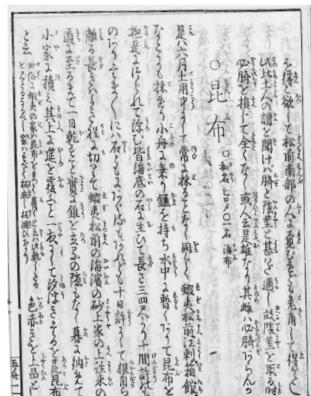
ぜ北端の産物が、日本で伝統的といえるほど、【古く】から【広く】広がったのでしょうか？ここで重要な働きをするのが「北前船」（前号参照）です。

## 昆布ロード

実は昆布、単にだし以外にも漢方薬として高い需要がありました。ここに目を付けて手を組んだのが、薩摩藩と、薬売りで有名な富山藩。

江戸時代の後期には、富山～薩摩～琉球（沖縄）を経由し、多くの昆布が漢方薬として清（当時の中国）へ輸出され、大きな利益を上げたといいます（Webサイト「ミツカン 水の文化センター」より）。昆布

▼山海名産図絵、寛政11（1799）年、「昆布」「蝦夷」「小舟に乗り錦（かま）」を持ち水中に暫くありて、昆布を抱（かかえ）是（これ）につられて浮む」など読める。



▲江差（北海道）における昆布収集船（大正～昭和初期）

►日本国尽（ニホン クニズクシ）.卷4／瓜生寅著、明治7（1874）年（明治時代の教科書より）



ロードと呼ばれます、この時、活躍したのが北前船で、経由した沖縄に昆布の食文化をも運んだのでした。

## 当たり前になった「流通」

よく日本は「南北に広がるため食材が豊かである」という記述を見ますが、それが可能になった理由に、海路の役割は決して小さくありません。そもそも列島として考えると、トンネル・橋でつながる前の時代では、陸路の限界は当然ありました。このように、流通に恵まれ過ぎて当たり前になってしまった「食の豊かさ」、島国・地形・風土・流通の視点で掘り起こすと、もっと多くの事例があるかもしれません。

